

- 91 *Ypthima molschulskyi* Bremer et Grey ウラナミジヤノメ  
ヒメウラナミジヤノメに似て居るが少しだ。後翅の眼状紋は一ヶである。大飯  
郡で採集せられたが稀である。三ツ松。
- 92 *Erebia niphonica* Janson ベニヒカゲ  
前翅外縁に近く黄紅色の広い帶があり其の中に眼状の紋が三ヶある。高山特産  
のもので大野市三つの峰で名和秀雄、土肥浩嗣両君によって採集せられたもので  
ある。稀（筆者も石徹白の山で採集したことがある。）三つの峰
- 93 *Minois dryas bipunctatus* Motschulsky ジヤノメチヨウ。  
裏褐色大形の種類で8~9月頃草の間に飛ぶ。頗多い方。♀は大きい。大野、富田、福井(坪田)栗野
- 94 *Pararge deidamia* Eversmann ツマジロウラジヤノメ  
前翅眼状紋の内側に二ヶの白帶がある。高山性で大野の山南部で採集出来るが  
少ない。上灰馬 石徹白。此の科の蝶は凡て日陰を好み、止る時は木の根や草の  
間に入いるものが多い。
- 95 *Lethe callipteris* Butler ヒメキマタラヒカゲ  
多數の黄斑が有って美しい。山地性で少ない。小池(名和、土肥)部子山(加賀鶴見)
- 96 *Lethe sicelis* Hewitson ヒカケチヨウ。  
日影の樹間に縫うて飛ぶ蝶で裏褐色で美しい。遠敷。
- 97 *Lethe diana* Butler クロヒカゲ  
前種に似て黒味勝となり、裏面の斑紋は濃い。淨法寺(坪田)遠敷。
- 98 *Neope goschkevitschii* Ménétriès キマタラヒカゲ  
裏褐色の紋が有って美しいので飛ぶ時は目立つが止る時は木の根に入る。鳩ヶ湯、遠敷。
- 99 *Mycalesis gotama* Moore ヒメジヤノメ  
淡黒褐色で日影を好み、8~9月室内に入っこ来る事がある。多い方。鳩ヶ湯、  
上灰馬、志比谷(土肥)
- 100 *Mycalesis francisca perdiccas* Hewitson コジヤノメ  
前種に似て色濃く、前種よりは少ない。鬼ヶ谷、遠敷

アメリカザリガ = *Cambarus clarkii* (GIRARD)  
の食性について

丹生郡白山小学校 伊藤十治

動物を研究するには、先づそれを採集し飼育してそれとの目的に従って処理

しなければならない。採集に当っては生態学的な立場から常に動動に注意を払う事を忘れてはならない。筆者が此に問題とする食性に於てもアメリカサリガニの野外に於ける自然の棲息状態を熟知し、所謂生態的な概念を常に急頭に置きつゝ飼育を進めることが、研究の発展上非常に重要なことではないかと思う。アメリカサリガニがどんな棲息場所に居るか。例えば棲息場所の水温(温度) pHの問題、土壌、水深、底質、植物群落、穴の状態、光などの関係について調べておく。次に其の動物の密度に注意を払う事である。これはオニに問題とする動物相互の関係に考慮して重要である。或る場所に棲息する動物群はお互いに緊密な関係を持っているものがあるから、それを出来るだけ詳細に観察しておく必要がある。もしその相互間に何か特別な関係例えば或る動物が、或る動物を食餌としているとか、又は或る動物の排泄物を或る動物が食べているとかが判明するからである。即ち食物の連鎖という事になる。オニには動物相は四季を通じ或は昼と夜とによって可成りの変化があるから、この事に注意して同一場所を何回も採集する事である。そして採集後直ちに胃を解剖する事が大切である。

此の方法が食性を調べて行く最も重要な事である。これを詳細に調査、記録、統計していくれば食性は理解されるのである。しかしこれが唯一の方法ではない。それは筆者が上述した色々の観察を考慮して実験的に飼育する事である。

飼育する上には、当然餌という事が重要な要素になってくる。この餌は常に飼育動物の環境によって制約されるものであつて、或る環境では好んで食べるような餌とも異なる環境では食べない場合がある。この現象は他の動物にもしばしば見られるものである。アメリカサリガニでも自然状態ではヒルを食べている(筆者はこれについて疑問をもっている。)といわれるが、実際飼育してそれを与えても食べないのである。これは野外から動物を採集して来て飼育を開始した当初に於ては大ていの動物には見られる。此の様な時には、動物の環境を出来る限り自然の状態にさせる必要がある。この様な意味に於ても野外に於ける生態的な観察が必要かくべからざるものであるから理解されるであろう。

さて一体何を食べて居るのであろうか。昨年の総会(1954)に於て本種が福井県の広範囲な部分に分布している事を報告した。一般の人々は本範囲に分布しているから、さぞかし何でも食べているのではないかと想像されるであろう。正しく其の通りで極めて雑食性を有するのである。しかしとの反面6ヶ月間位は飢餓に耐える事ができる。(採と餌: 15:6)。野外に於てはいろいろの小動物を始め、田に生む蛙、ドゲヨウ、ミミズ、昆蟲等は好むもので、甲殻也氏

の埼玉県に於ける調査では最も好むものではヒル、ミミズ、又肥料の豆粕、メタセコイアなど食われる事もあると報告している。筆者の経験ではいろいろの植物の纖維又は、木片、土壌、アメリカサリガニの甲殻片などが食べられる。どちらかといふと動物性がよく好まれるものである。又キヤラメルまでと食べるのを見るに正しく人間と同様ではないかとさえ疑われるものである。これは味覚と関連して實に面白い現象である。食べる量は動物の種類によってもいろいろであるし、幼生期成体期によつても異なるものを一概にいう事は出来ないが多くの場合を考えるヒントによって時に水質が変化してそれが飼育動物に害を及ぼさない限り餌は多く与える事である。採取する量は動物の発育の段階によっても異なるし季節的にも異なるから一概には言えない。一般に冬季を中心に秋の終り頃から春季の始め頃迄は全餌をヒラギニ。しかし冬季間でも水温 $25^{\circ}\text{C}$ 位にするヒ一年中餌を攝取する。

成体で一日に中形のトノサマガエル一匹を一日で攝取したという報告（採集10：10）がある。この様に考えて行くヒ、本種は極めて雜食性ではあるが（どちらかといえば動物性を好み）一方6ヶ月間も飢餓に耐える事が出来るヒ見える。

## 採集雑記

福井市春山小学校 小林貞七

私が種々難多き採集をする様になつた動機は、昭和28年に福井市に博物館が設立される事が決定されこれからであります。およそ來漫標本の対象となる動物は一切収集する様にヒの博物館長の命令によるものであります。ずっと以前満洲におりました頃はあの土地の植物にひかれて南は旅順から北は満洲里にわたる採集旅行をした事もありますが、両棲類、爬虫類から魚類、棘皮動物、節足動物、腔腸海綿動物に渡るとの近採集するとなるヒこれは容易ではないと思つたのであります。最初お引受けした時は、それ等の動物をどこでどんなにして採集しそれをどうして來漫標本にするかと見当がつかずすっかり困つてしましました。然し先輩の方々の教示を受けた様な人の協力によって、現在博物館に陳列されている六本のケースの標本と資料室に保管中の千余点の標本を作成する事が出来、現在も尚細々乍らその仕事を続けております。

今日漸くいつ頃ヒこへ行けばどんなものが採集出来るか、其の標本はどんなにすれば作り上げる事が出来るかと会得したような気が致します。次に私の勉強し